

「燕丹子」、『平家物語』および謡曲「咸陽宮」の始皇帝像について

高芝 麻子

はじめに

秦の始皇帝として知られる嬴政がまだ秦王であった紀元前二二七年、燕国の太子丹に刺客荆軻を差し向けられ、九死に一生を得るといふ事件が起こった。この事件は『史記』にも記録されており、様々な派生的物語を生みだしてきた。これらの派生的物語も含む、荆軻による秦王暗殺未遂をものがたる文献を、以下に荆軻故事と呼ぶこととする。

日本における荆軻故事の代表的なものの一つに謡曲「咸陽宮」がある。結びの部分以下に引用しよう（1）。

（歌）シテ「御門又剣を抜いて

同「御門又剣を抜いて、荆軻をも秦舞陽をも、八

つ裂きに裂き給ひ、たちまちに失ひおはしまし、
其後燕丹太子をも、程なく滅ぼし秦の御代、万世
を保ち給ふ事、唯是後の琴の秘曲、有難かりける
ためしかな。

本論が注目するのは、「秦の御代、万世を保ち給ふ事」という一節である。荆軻の暗殺が未遂に終わり、太子丹が亡ぼされた後、秦の統治が長く続いたと述べているのであるが、秦の皇帝は万世どころか三代しか続かず、王朝そのものも天下統一からわずか十五年ほどで滅んでいる。謡曲の作者が秦の歴史を知らなかったとは思われない。では、なぜその秦が永続したかのように描かれているのだろうか。

本論は、荆軻故事に登場する秦王政あるいは始皇帝の描かれ方が、日中でどのよう異なるかを比較

し、分析するものである。その日中比較の観点から、謡曲「咸陽宮」が秦の永続を言祝いで結ぶ理由を明らかにしていきたい。

なお、荊軻故事の時点で、秦王政はまだ天下を統一しておらず、始皇帝という称号も名乗ってはいない。しかし、本論においては、即位前の秦王政を始皇帝と呼ぶ場合があることをあらかじめお断りしておきたい。

一 荊軻故事のあらすじ

西野春雄氏が『謡曲百番』の解題に「燕の太子丹の意を承けた荊軻と秦舞陽が咸陽宮に赴き始皇帝の謀殺を計る話（平家物語五・咸陽宮）」に拠り、皇帝の王威の不可侵性と刺客の覇氣とを描く⁽²⁾と述べるように、謡曲「咸陽宮」が『平家物語』に材を取ることは広く知られている。

『平家物語』巻五「咸陽宮」の拠った先行作品は何かという問題については、すでに多くの先行研究がある。青木正児氏は『支那文學藝術考』⁽³⁾において、「其等が史記に拠つたもので無く、燕丹子に本づいたと考ふべき」とし、「燕丹子」が直接的な出典であろうと指摘しているが、延慶本『平家物語』に

おいては『史記』の荊軻故事をも取り込んでいることを佐伯真一氏が明らかにしている⁽⁴⁾。さらに、黒田彰氏は『平家物語』「咸陽宮」の中に「燕丹子」や『史記』に見られない内容があることについて、『和漢朗詠集』の注釈に近しい内容が見られることなどから、中世の日本に流布していた独特な『史記』解釈（黒田氏の用語によれば「中世史記」）の存在を指摘している⁽⁵⁾。

『平家物語』の依拠した『史記』と「燕丹子」について概要を述べよう。

『史記』巻六「秦始皇本紀」には秦王政の二十年（紀元前二二七年）に、燕の太子丹が秦に侵略されることを恐れて荊軻を派遣し、秦王政を殺そうとしたが果たせなかったとの記事を載せる⁽⁶⁾。卷三十四「燕召公世家」にもほぼ同様の記事が見え、また卷四十一「楚世家」、卷四十四「魏世家」、卷四十六「田敬仲完世家」などにも触れられている。以上の本紀や世家の記事は簡潔であるが、卷八十六「刺客列伝」には荊軻の伝記の体裁で事件の全容が詳細に語られる。暗殺に関わるあらましは以下の通りである。

① 燕太子丹は秦で人質となっていたが、秦王政の仕打ちを恨んで逃亡し、燕に帰国した。

② 秦への報復を望んだ太子丹は、太傅鞠武や田

光を介して荊軻を賓客に迎える。

③ 賓客として大切に育てられた荊軻は、太子丹から依頼された秦王暗殺を引き受ける。

④ 秦から亡命した將軍樊於期の首と燕・督亢の地図を献上品として、荊軻は燕の秦への恭順を表す使者を装い、秦舞陽を伴って咸陽宮で秦王政に謁見する。

⑤ 秦王政の袖を掴み、地図に隠していた匕首を突きつけ、殺そうとするが、秦王政は逃れて自ら剣を抜き荊軻を殺し、暗殺は未遂に終わる。

なお、「秦始皇本紀」では暗殺を計画する理由を、秦の軍が燕に攻め込むことを恐れたためとする点が、「刺客列伝」での記事と異なっている。

「燕丹子」は作者も成立時期も明らかではない書物であるが、鈴木靖『「燕丹子」考』（7）によれば、「燕丹子」の原型は、遅くとも後漢には成立していたと見られる。以下にあらすじを示す。

① 燕太子丹は秦で人質となっていたが、秦王政の仕打ちに耐えかね、帰国の許しを求め、秦王に無理難題を言いつけられたが、天助により難題を解決し、帰国する。

② 秦への報復を望んだ太子丹は、太傅鞠武や田光を介して荊軻を賓客に迎える。

③ 賓客として大切に育てられた荊軻は、太子丹から依頼された秦王暗殺を引き受ける。

④ 秦から亡命した將軍樊於期の首と燕・督亢の地図を献上品として、荊軻は燕の秦への恭順を表す使者を装い、秦舞陽を伴って咸陽宮で秦王政に謁見する。

⑤ 秦王政の袖を掴み、地図に隠していた匕首を突きつけ、殺そうとするが、死を覚悟した秦王政が寵姫の琴の音を聞いてから死にたいと願いで許される。琴の音に込められたメッセーヂを聞いて、秦王政は逃げる方法を悟り、自ら荊軻を殺し、暗殺は未遂に終わる。

『史記』「刺客列伝」と比較したとき、あらすじにおいては①と⑤が大きく異なるだけで、それ以外はほぼ同じ内容となっている。『平家物語』「咸陽宮」は、①と⑤にあたる部分が「燕丹子」に近い内容であるため、「燕丹子」系の故事を継承したと理解されるわけである。

『平家物語』「咸陽宮」に影響を与えた『史記』と「燕丹子」であるが、中国においても、正史である『史記』のみならず、「燕丹子」も広く知られている。では、中国で荊軻故事はどのように受容されていたのだろうか。次章で見ていきたい。

二 中国古典における荊軻故事の始皇帝像

まず、後漢・鄒陽「獄中上書自明」(『文選』卷三十九)に見える荊軻への言及から確認していこう。「獄中上書自明」は鄒陽が梁の孝王の怒りを買ひ、投獄された際に、弁明のために書いた上書である。

臣聞、忠無不報、信不見疑。臣常以為然、徒虚語耳。昔者荊軻慕燕丹之義、白虹貫日、太子畏之。衛先生為秦画長平之事、太白食昴、昭王疑之。夫精誠變天地、而信不諭兩主、豈不哀哉。

臣聞く、忠なれば報はれざる無く、信なれば疑はれず、と。臣常に以て然りと為すも、徒らに虚語なるのみ。昔者荊軻は燕丹の義を慕ひ、白虹は日を貫くも、太子之を畏る。衛先生秦の為に長平の事を画し、太白昴を食むも、昭王之を疑ふ。夫れ精誠は天地を変ぜしむるも、信に兩主を論らしめず、豈に哀しからずや。(私は忠臣であれば必ず報いられ、誠実であれば疑われることがないと聞いております。私もその通りだと思っておりましたがそれは絵空事でございました。かつて荊軻は燕国の太子丹の義を慕い、その至誠は太陽を

白虹が貫くほどでありましたが、太子丹は暗殺の失敗の子兆であると誤解し、恐れました。衛先生(公孫鞅)も秦国のために長平の戦いについて画策し、その至誠は金星が昴を侵食するほどでありましたが、秦の昭王はその忠義を疑いました。天地に異変を生じさせるほどの誠実な真心であったのに、燕太子丹と秦昭王にそうと悟らせることはできなかつたと、悲しいことではありませんか。)

引用は冒頭部分である。これに続けて、鄒陽は主君の怒りを買った自身も、また荊軻や衛先生のように誠を尽くしていたのであり、冤罪であると訴える。つまり、ここでは荊軻は至誠の人として登場しているのである。またその荊軻が燕丹子に誠を尽くしたのは燕太子丹が「義」の人であったからとされている。これらの人物理解が、当時の人々にとって自明、かつ疑義のないものでなければ、身の潔白を訴える上書で自身になぞらえて言及されることはないであろうから、当時の荊軻への評価は非常に肯定的であったと考えていいだろう。

なお、鄒陽の言及する、太子が畏れた「白虹貫日」は、帯状の白い光(白虹)が太陽を貫くように見える気象現象であるが、『史記』や「燕丹子」の荊軻故

事には言及されていない。唐・李善の『文選』注によれば太子は暗殺が成功しないであろうと恐れたのであり（畏、畏其不成也）、李善の引く『列士伝』には荆軻が出発した後、太子は白虹が太陽を貫こうとして貫通しないのを見て、自分の計画が成功しないことを悟ったとの故事が記されている（8）。『列士伝』によれば白虹が太陽を貫ききらなかったために疑念を生じさせたとしているが、鄒陽は荆軻の至誠（精诚）が天地に変異を生じさせた点を重視しており、つまり天地を動かすほどの誠をそこに読み取ったと言えるだろう。

以上のように、鄒陽は燕太子丹が荆軻を疑ったことを批判しているものの、秦王政暗殺そのものに対しては肯定的な立場を取っていることが確認できた。次に六朝宋・陶淵明の詠史詩「詠荆軻」を見よう（9）。荆軻の暗殺について詠う詩であるが、結びの四句で陶淵明は以下のように言う。

惜哉劍術疎 惜しきかな 劍術 疎にして
奇功遂不成 奇功遂に成らず

其人雖已没 其の人 已に没すると雖も

千載有余情 千載 余情 有り

陶淵明は燕太子丹が秦王政暗殺のために人材を集めたところから詠いおこし、暗殺の失敗までを描い

た上で、その理由を荆軻の劍術の拙さに求める。しかし、暗殺失敗については「惜哉」とし、暗殺の達成を「奇功」と表現する。さらには、荆軻が千年先まで慕われるであろうと結んでいる。この詩も荆軻を高く評価しており、秦王政暗殺が失敗したことを歎いていると言える。

以上に二つの例を見たが、中国古典における荆軻理解は概ねこの兩作品と同様の傾向を持つ。つまり、荆軻は常に肯定的に言及され、彼が為そうとした秦王政暗殺に対しても、為すべきことを為そうとして失敗したと理解されているのである。そこから、秦王政が暗殺されるべき、あるいは暗殺されても仕方がない存在であるという理解が共有されていることも窺える。

では、秦王政、あるいは始皇帝はどのように評価されていたのであろうか。『文選』巻十に見える西晋・潘岳「西征賦」には、亡国の君主として周の幽王に続けて始皇帝に言及する。

又有継於此者、異哉秦始皇之為君也。傾天下以厚葬、自開闢而未聞。（中略）語曰、行無礼、必自及。此非其效与。

又た此を継ぐ者有り、異なるかな秦始皇の君たるや。天下を傾むけて以て厚葬するは、開

關よりして未だ聞かず。(中略)語りて曰はく、無礼を行はば、必ず自ら及ぶと。此れ其の效に非ざるか。(亡国の君主として後に続く者がいる、始皇帝の君王ぶりは実に奇妙である。自身の陵墓造営に国力を費やし天下を傾けるなど、天地開闢以来聞いたことがない。(中略)世に言う、「礼にもとる行いをすれば必ず自分に返ってくる」というが、これこそよい証拠であろう。)

始皇帝の陵墓造営により国を傾けたこと、そのために働いた人々を生き埋めにしたことなどを批判し、彼の造営した宮殿や陵墓が灰燼に帰したのは、その報いであろうと述べる。この始皇帝批判に続けて、潘岳は漢の高祖劉邦の徳を称えており、始皇帝は周の幽王とともに亡国の暗君として、劉邦と対比的な位置に配されている。

始皇帝自身は、長らく続いた戦国時代を終わらせ、中国を統一した初代皇帝であるため、漢の劉邦と同じく名君として評価することもできたはずである。しかし、秦は短命王朝であり、始皇帝の死の翌年に反乱が起こり、四年後に滅んでいることから、亡国の暗君と見なすこともできる。潘岳は始皇帝を亡国の責めを負うべき者として評価したと言えるだろう。

この始皇帝解釈は、決して潘岳の独創ではない。

漢代以降、中国の皇帝は「皇帝」と「天子」という二つの側面を持つこととなる。齋藤道子「秦の始皇帝」と「漢の高祖劉邦」——「皇帝像」を考える(10)によれば「一人の人間が、「皇帝」としては中国国内の絶対者として中国を統治し、「天子」としては天の監督下に天下の民を徳化し教化する」という儒学に基づく発想が、前漢末ごろまでに定着したという。つまり、皇帝は地上に対しては絶対的な権限を持つ存在であると同時に、天子としてその政治の可否を天に監督され、評価される存在でもあった。天からの評価は災異など様々な形で地上に現れるが、その最大のものとは易姓革命と呼ばれる王朝の交替である。漢代以降に定着した皇帝観から考えれば、始皇帝の秦はわずかな期間で天の信任を失い、易姓革命が起こり、漢王朝へと交替することとなったのであり、始皇帝もまた天の信任に堪えない統治者であったと見なされることとなる。

中国において「天子」としての皇帝が、天からの評価を受けるべき立場である以上、人々が過去の皇帝を評価するとき、天からの評価を一つの指針とするのは当然のことであろう。そのため、潘岳が「西征賦」において示したような、亡国の暗君としての

始皇帝像は標準的な歴史理解として中国古典世界に広く見られることとなる。だからこそ、荊軻の行為が義挙として認められ、荊軻が至誠の人と称えられることとなるのであろう。

やや極端に図式化して示すとすれば、中国の古典世界においては、始皇帝は悪であり、後の始皇帝である秦王政を排そうとする荊軻は善であるという理解が、自明のものとして共有されていたのである。ここでは紙幅の都合上、唐代以前の用例に絞って荊軻と秦王政への評価を見たが、この傾向はおおよそ後世に引き継がれていくこととなる。

三 『平家物語』『咸陽宮』における始皇帝像

「はじめに」で紹介した通り、謡曲「咸陽宮」が『平家物語』巻五の「咸陽宮」から派生した物語であることは、先行研究によって明らかにされている。また、『平家物語』「咸陽宮」は日本独自の『史記』解釈を含みつつも「燕丹子」に基づいて構想されたと見て大過ないものと思われる。また『平家物語』の異本の一つ『源平盛衰記』巻十七にも「始皇燕丹并咸陽宮事」と題して荊軻故事が採録されており、あらずじはほぼ一致する。

では、その『平家物語』の荊軻故事において、秦王政と荊軻はどのように評価されているだろうか。なお、本論においては『平家物語』は語り本系の覚一本(11)と、読み本系の『源平盛衰記』(12)を用いる。

まず確認しておきたいのは、覚一本でも『源平盛衰記』でも荊軻故事中の秦王政が「始皇(帝)」と呼ばれていることである。荊軻が秦王政の暗殺を目論んだ時点では、国力の差こそあれ、秦国と燕国は対等な独立国であった。その秦王政が他国を亡ぼし天下を統一した後には名乗ったのが「始皇帝」である。つまり、史実としては秦王政でなければならぬ暗殺対象を始皇帝と呼称したとき、秦国は燕国の上に立つ存在となり、始皇帝と燕太子丹の間に史実から乖離した上下関係が生じてくることになる。

覚一本、『源平盛衰記』いずれの荊軻故事も、燕太子丹が秦に戦いを挑んで破れ、捕虜となった場面から始まる。『史記』では戦国時代に国家間で行われていた人質の交換の一環として燕太子丹が秦の人質となっており、そもそも秦にいる理由から異なっている。さらに興味深いのは、燕太子丹が親への孝行を尽くしたいと願って帰国を願い出た点である。始皇帝から無理難題を与えられたものの、太子は天助に

よってそれを乗り越え、帰国した。無理難題を天助で解決する経緯は「燕丹子」をなぞっているが、「燕丹子」においては、太子は秦の無礼に怒って帰国を望み、無理難題を与えられており、親孝行のためという要素はない(13)。以下は覚一本の帰国後の場面である。

太子丹うらみをふくんで、又始皇帝に従はず。始皇官軍をつかはして燕丹を討たんとし給ふに、燕丹おそれをのゝき、荆訶といふ兵をかたらふて大臣になす。

荆訶が荆訶と表記されていること、大臣に取り立てられていることはここでは措く。注目したいのは、始皇帝が「官軍」を遣わしたとする点である。始皇帝が燕に対し軍事行動を起こしたとしても、本来、それは戦国時代に群雄割拠していたうちの一つである秦国の軍に過ぎず、官軍ではない。国力の差こそあれ、理念上は、燕国はそれを対等に迎え撃つことができたはずである。しかし覚一本は、秦王政を始皇帝と呼ぶのみならず、秦軍を官軍と称して明確に始皇帝を体制側とし、太子丹を反体制側と見なしているのである。

この傾向は『源平盛衰記』巻十七でも確認できる。故事の展開は覚一本とほぼ一致しているが、始皇帝

を是とし、燕太子丹を非とする意識がより分かりやすく示されている。帰国後の場面を見よう。

燕丹はのがれ難き罪科をのがれ、本国に被還て再父母を見ければ、深く始皇の恩を報ぜんところ思べきに、其情を忘れて、秦国を亡さんと巧む心切にして……

「始皇」は始皇帝を言う。問題は、燕太子丹が秦に戦いを挑んで敗北しながら許されたことを、「深く始皇の恩を報ぜんところ思べきに」としている点である。始皇帝が燕太子丹の帰国を許したことを「始皇の恩」と見なしているのだが、この発想は『史記』や「燕丹子」には見られない。『史記』の場合は、そもそも秦王政が帰国を許していないため、恩義などあり得ない。「燕丹子」では太子丹が帰国できたのは秦王政からの無理難題を天助により解決できたためであり、天助を得たのは、太子丹の正統性を天が認めたためである。そうである以上、秦王政よりも太子丹の方がより正しいということになり、秦王政に恩義を感じるいわれはない。このように覚一本、『源平盛衰記』ともに、始皇帝と燕太子丹は、中国系の故事とは全く異なる関係性を持つのである。

もう一点、始皇帝と、燕太子丹あるいは荆訶の関係性の違いを確認したい。覚一本ではこの故事を以

下のように結ぶ。

官軍をつかはして燕丹をほろぼさる。蒼天ゆるし給はねば、白虹日をつらぬいて通らず。秦の始皇はのがれて、燕丹つみにほろびにき。

燕太子丹が亡ぼされた理由を「蒼天ゆるし給はねば」、つまり、天が許さなかったからだとする。『源平盛衰記』では忘恩ゆえに滅んだとして、「燕丹昔の恩を忘れて、還て始皇を傾んと計しかば、己が身空く亡ぬ」と結ぶ。こちらには明確な天の介入は言及されないが、忘恩の報いを受けたということであれば、やはり天が燕太子丹を許さなかったと理解してよいだろう。

中国における荆軻故事理解では、秦王政が悪、荆軻が善であり、この両者の関係性に重点が置かれている。燕太子丹は悪である秦王政に虐げられていたことから、秦王政に対しては善であるが、荆軻を疑ったことから荆軻に対しては悪という複雑な立場となる。しかし、『平家物語』に見える荆軻故事においては、始皇帝は官軍であり、善である。燕太子丹は覚一本では天助を受けて帰国できたにも関わらず秦に背いたために、天に許されなかった者であり、『源平盛衰記』でも忘恩の者として、悪の立場にある。

荆軻は燕太子丹に使役されることから、燕太子丹と同じ立場と見ていいだろう。

つまり、日中の荆軻故事理解で、始皇帝と燕太子丹・荆軻の関係性は全く異なっているといえるだろう。この違いはどこから来たのであろうか。次章に分析していきたい。

四 『平家物語』における「咸陽宮」の位置

まず、荆軻故事が『平家物語』においてどのような機能を果たしているかを確認したい。巻五「咸陽宮」の直前には、源頼朝が伊豆で反旗を翻したとの報せを受け、平清盛が激怒したというエピソード(大庭早馬)に続けて「朝敵揃」という一段がある。神武天皇の時代にまで遡り、朝敵の歴史をたどり、誰一人としてその野心を満たし得た者はいなかったと結ぶ一段である。その一段に続けて、「咸陽宮」が置かれるのであるから、中国における朝敵の例として燕太子丹が登場してくることとなる。「朝敵揃」の文脈に従い、燕太子丹を源頼朝に比すとすれば、始皇帝に比定されるのは天皇であろう。また『平家物語』全体の文脈で捉え直し、朝敵を平清盛であると想定したとしても、始皇帝は天皇となる。

『平家物語』で天皇を始皇帝になぞらえる箇所は他にもある。『平家物語』序章で日本と中国の朝敵を並べ、彼らの悪行も清盛ほどではないと述べる一節に「秦の趙高」の名が見える(14)。趙高とは始皇帝に仕える宦官であり、『史記』「秦始皇本紀」などの記述によれば、始皇帝の死後、遺命に背いて始皇帝の長男扶蘇を自殺に追い込み、自身の意のままに動く末子胡亥を即位させるなど悪逆の限りを尽くし、秦の滅亡を早めたとされる奸臣である。

兵藤裕己氏は『王権と物語』(15)において、『平家物語』序章を「朝敵」の必滅をとく王権因果論と見なす。また、大津雄一氏は『軍記と王権のイデオロギー』(16)の「総論」において、軍記物を以下のような物語であると定義づけている。

天皇王権の至高性を共通の規則とする共同体内部の秩序に、異者(反逆者・朝敵)が混沌を一時的に現出させるが、天皇王権を護持する超越者(神仏・冥衆・天)の加護のもと、異者は忠臣により排除され、共同体は秩序を回復する。

大津氏の定義によれば、『平家物語』は、朝敵平清盛によって生じた混沌からの、天皇王権の回復の物語であるといえる。趙高が秦王朝の混乱を生じさせた存在であることから、平清盛に比定されたわけだ

ある。では始皇帝は具体的には誰のなぞらえなのか。王権と清盛の関係については赤坂憲雄「平家物語と王権―物語にとつて外部とはなにか」(17)に以下のように説明されている。

清盛は(王)にひとしい、だがけっして(王)それ自体ではない、いわば(王)の影ともいえる場所から専断的権力を行使する。そして、じつは『平家物語』という物語空間には、(王)その人は姿をみせない、むしろ(王)は不在である。

さらに赤坂氏は王について「それはほかの何者によっても代行不可能と信じられているために、どれほど形骸化しようとも制度としては存続せざるを得ない」とし、王の影について「影こそが実質的な権力の掌握者であり、不在の(王)をほしいままに操りつつ王国に君臨する。しかも、影はけっして(王)の座にのぼりつめることはしない」と述べている。つまり赤坂氏の表現を借りれば、荊軻故事の始皇帝は、『平家物語』においては、王権構造の中で形骸化し、不在の王(天皇)のなぞらえ、あるいは王権という制度そのものであることになる。

そうであるならば、『平家物語』に見える荊軻故事は、「ほかの何者によっても代行不可能」な存在であ

る始皇帝と、朝敵である燕太子丹という図式で読み解くことができるであろう。中国の荊軻故事では天の信任を失った亡国の暗君である始皇帝が、『平家物語』においては他ならぬ天そのものであるかのように権力の源泉として君臨しているのである。その結果、始皇帝を暗殺しようとした燕太子丹と荊軻とが、中国においては肯定され、『平家物語』においては否定されることとなる。同じ故事を語っておりながら、日中の物語の枠組は全く異質のものとなっていると言わざるを得ない。

しかし、燕太子丹が朝敵であるという枠組で物語を捉えた場合、いささか不都合な点がある。「燕丹子」系の荊軻故事の前半には、燕太子丹が帰国を望み、天助によって帰国が叶うという場面があるが、その場合、朝敵に天助が与えられることになってしまうという点である。中国の荊軻故事理解であれば、天助は、燕太子丹に同情的である話の枠組に齟齬しないが、始皇帝を善と見なす文脈では天助は不都合である。『源平盛衰記』などの語り本が燕太子丹の孝心をことさらに重視するのは、天助が与えられる理由が必要だったのかもしれないが、いずれにせよ、いささか話がすつきりしない。

兵藤裕己氏は『平家物語』『咸陽宮』が燕太子丹と

荊軻に「きわめて同情的」であり、「殺されかけた国王は、希代の暴君とされる始皇帝」であることを指摘し、「この話では、国王への反逆イコール悪行という論理がなりたたない」とする(18)。だが、始皇帝が暴君であり、燕太子丹や荊軻に同情的であるのは、『史記』や「燕丹子」から受け継がれた価値意識であり、むしろ暴君であるはずの始皇帝が恩を与え、燕太子丹がその恩に背いたために、天に許されず滅びることとなったという新たに加わった価値意識にこそ(そしてそれが恐らく無意識のうちに加わったものであるところにこそ)、『平家物語』の荊軻故事の特色が見いだせると考えたい。なぜなら、謡曲「咸陽宮」がその価値意識をより明確化する形で受け継いでいくからである。

五 謡曲「咸陽宮」における始皇帝像

謡曲「咸陽宮」は前述の通り『平家物語』に拠って成立しているため、「燕丹子」系の枠組を持つものの、描かれるのは荊軻故事の後半部分(あらずじ④⑤)のみである。つまり前半の天助の場面は存在しない。その結果、燕太子丹への同情的な描写はなくなる、つまり、始皇帝を批判する要素がなくなるこ

ととなる。

もう一つ、謡曲「咸陽宮」には始皇帝の意味づけについて注目すべき点がある。それは上演された経緯である。前掲の『謡曲百番』では謡曲「咸陽宮」の概要を「燕の太子丹の意を承けた荊軻と秦舞陽が咸陽宮に赴き始皇帝の謀殺を計る話（平家物語五・咸陽宮）に拠り、皇帝の王威の不可侵性と刺客の覇気とを描く」とした上で、その成立背景を「正長二年（一四二九）五月の室町御所笠懸の馬場で行われた観世両対宝生十二座の立合猿楽に、観世方の演目「秦始皇」が本曲と推測され、將軍宣下を承けた足利義教の御代始を記念する晴れの能と推考されている」と説明する。

今までに見てきた通り、中国での荊軻故事は「皇帝の王威の不可侵性」を主題とした物語ではない。そのように読まれるようになったのは『平家物語』（あるいは黒田氏の言うところの「中世史記」）などに拠るのである。例えば大津雄一氏は「義仲考 王権の（物語）とその亀裂」（19）において「頼朝が朝敵ではなかったという確信を得た受容者が、フィードバックして、「朝敵揃」「咸陽宮」で選択して残す情報は、「朝威」を滅ぼそうとするものは逆に必ず滅び、昔は「宣旨」という「朝威」に驚などという鳥

さえも従ったという王権の絶対不可侵性」であると語る。「朝敵揃」「咸陽宮」が頼朝の反乱を踏まえて語られ、朝敵は必ず滅ぶと言明されることによって、受容者は、滅びなかった頼朝は朝敵ではなく、滅んだ清盛こそが朝敵であったと理解することになる。そう考えたとき、「咸陽宮」の骨格は、朝敵必滅のことうわり、言い換えれば「王権の絶対不可侵性」であったわけである。荊軻故事の始皇帝に「皇帝の王威の不可侵性」を読み取れるのは、始皇帝本来の在り方や、荊軻故事本来の解釈によるものではなく、『平家物語』の文脈の中で役割に拠ることとなる。

「王威の不可侵性」を明らかにする作品は晴れの能として相応しい。ではここで「王威」、つまり始皇帝に擬されているのは誰であろうか。『平家物語』において、始皇帝は天皇王権のなぞらえであった。しかし謡曲「咸陽宮」は足利義教への宣下を祝して演じられたものである以上、「秦の御代、万世を保ち給ふ事」という言祝ぎは、足利義教自身あるいは足利家への予祝であろう。そうであれば、『平家物語』において天皇王権を象徴していた始皇帝に、室町幕府の將軍である足利義教が自らを重ねることとなる。それはすなわち、両者の間に異なる王権の捉え方がなされていることを意味するだろう。

前述の通り、中国の皇帝（天子）の上には天が在る。皇帝を選び、評価し、暴君には天譴を加え、それでも悪政が続く場合は易姓革命を行うのが天の役割であった。この仕組みは、天皇が地上の統治者である征夷大將軍を選び、任命する仕組みとよく似ている。つまり、天Ⅱ天皇、皇帝Ⅱ將軍という王権の捉え方をすれば、始皇帝を足利義教に読み替えることが可能になってくるということである。この変化の根底には、『平家物語』と謡曲「咸陽宮」の王権の捉え方の違いというよりも、もつと大きな、それぞれの時代ごとの王権の捉え方、あるいは世界観が影響を与えているように思われる。

兵藤裕己氏（20）は『平家物語』が日本社会に与えた影響として、「武家政権を王朝国家に組み入れる構想」を浸透させたことを指摘している。氏は「王朝の政治秩序を価値基準とした源平交替の「歴史」が「語り物として流布・浸透したこと」で、「以後の政治史の推移さえ規定」したと述べる。武家政権が北条家（平家）、足利家（源氏）、織田家（平家）、徳川家（源氏）という「朝家の御まもり」である平家と源氏の間で交替しながら続くという政治観が『平家物語』によって定着したとの指摘である。兵藤氏の述べるように武家政権の政治史が規定されたとい

うことであれば、それは言い換えれば、赤坂氏の言うところの「ほかの何者によっても代行不可能」な王朝の下に、「専断的権力を行使する」武家政権が源平で交替しながら継続的に存在するという世界観が確立し、共有されるようになったということになるだろう。平清盛や源頼朝が特異な、一過性の朝敵であれば、それは燕太子丹や荊軻に比定すべき存在である。しかし、武家政権が常態となれば、正統な権力の行使者と認識されるようになり、中国の皇帝に擬すことができる存在となる。そのような政治体制の捉え方の変化によって、謡曲「咸陽宮」の始皇帝の立ち位置の読み替えが可能になったのではないだろうか。

中国古典の文脈においては、荊軻故事の始皇帝は天から見放された存在であり、祝いの場で將軍宣下を受けた者をなぞらえるのには、決して相応しくない存在である。それが、日本において変質したからこそ、將軍となることへの祝福の場で行われるに相応しい演目となったといえる。冒頭で指摘した謡曲「咸陽宮」の「秦の御代、万世を保ち給ふ事」という文言も、始皇帝本人の史実や、荊軻故事における意味づけを踏まえれば、不可解極まりないが、「秦の御代」が「ほかの何者によっても代行不可能」であ

る天皇王権の「絶対不可侵性」、それは同時に天皇からの委任を受けた將軍の「絶対不可侵性」でもあるが、それらによって担保されたことで、万世を保つ祝福として機能するようになるのである。

おわりに

以上に、荊軻故事を始皇帝の描かれ方から比較・検討してきた。

前述の通り、中国においては、皇帝とは地上に対して絶対的な権限を持つ存在と同時に、天子としてその政治を天に評価される存在でもあった。政治に重大な瑕疵があれば、天が易姓革命をもたらし、地上の支配者は別の一族に交替することになる。ところが、日本においては、天皇は政治を天から評価される立場になく、別の一族が取って代わるということも想定されていない。

そのような王権の在り方の根本的な違いを度外視し、荊軻故事は始皇帝の位置に天皇を据える形で『平家物語』に取り込まれることとなった。その結果として、批判されるべき立場にあった始皇帝は肯定されるべき立場へと転換され、それに伴い、燕太子丹、荊軻の立ち位置も逆転した。その解釈を引き継いで

成立した謡曲「咸陽宮」が、始皇帝のなぞらえを天皇から足利義教へとスライドさせることができたのも、始皇帝が肯定的なイメージを持つ存在へと変化していったからである。

その始皇帝のなぞらえの変化は荊軻故事に内在する要因に拠るのではなく、荊軻故事を受容する側の世界観に起因している。中国での理解は中国の皇帝制の在り方・捉え方を踏まえ、日本での理解は日本の王権の在り方・捉え方を反映しているのである。

その一方で、日本漢詩・日本漢文に言及される荊軻故事は、中国古典の理解を踏襲し、始皇帝に批判的、荊軻や燕太子丹に同情的である。つまり日本では和文と漢文でダブルスタンダードの荊軻故事理解が行われていたこととなる。また、日本の古典に取り込まれた始皇帝は風流人としての側面も備えていた。これらの問題については紙幅の都合で論じることができなかつたため、次稿に譲ることとしたい。

注

- (1) 西野春雄『新日本古典文学大系57 謡曲百番』岩波書店、一九九八。

- (2) 前掲書。
- (3) 初出は弘文堂書房、一九四二。引用は『青木正児全集』第二巻、一九四七。
- (4) 「平家物語燕丹說話の成立」(『軍記と語り物』十五、一九七九)。
- (5) 「一 平家物語と注釈 2 咸陽宮覺書——朗詠注との関連——」(『中世說話の文学史的環境』所収、和泉書院、一九八七)。
- (6) 二十年、燕太子丹患秦兵至国、恐、使荆軻刺秦王。秦王覺之、体解軻以徇、而使王翦、辛勝攻燕。燕、代發兵擊秦軍、秦軍破燕易水之西。
- (7) 『政法大学教養部紀要』第九十五、外国語学・外国文学編、一九九六。
- (8) 荆軻發後、太子相氣、見白虹貫日、不徹。曰、吾事不成矣。後聞軻死。太子曰、吾知其然也。
- (9) 燕丹善養士、志在報強嬴。招集百夫良、歲暮得荆卿。君子死知己、提劍出燕京。素驥鳴陌陌、慷慨送我行。雄髮指危冠、猛氣衝長纓。飲餞易水上、四座列群英。漸離擊悲筑、宋意唱高聲。蕭蕭哀風逝、淡淡寒波生。商音更流涕、羽奏壯士驚。心知去不歸、且有後世名。登車何時顧、飛蓋入秦庭。凌厲越万里、逶迤過千城。囚窮事自至、豪主正怔營。惜哉劍術疎、奇功遂不成。其人雖已没、千載有余情。(『古詩源』卷九「晉詩」)
- (10) 『經濟史研究』二十卷、二〇一七。
- (11) 梶原正昭・山下宏明校注『新日本古典文学大系 平

- 家物語 上』(岩波書店、一九九一)。
- (12) 黒田彰・松尾葦江校注『中世の文学 源平盛衰記(三)』(三弥井書店、一九九四)。一部表記を改めた。
- (13) 『平家物語』「咸陽宮」の故事が中国系の故事と異なる燕太子丹の恩愛を重視する点は、今成「燕丹說話の展開と平家物語」(『軍記と語り物』三号、一九六五)に詳しい。
- (14) 遠く異朝をとぶらえば、秦の趙高・漢の王莽・梁の朱忌・唐の祿山、是等は皆旧主先皇の政にも従はず、樂みをきはめ、諫をも思ひいれず、天下の乱れむ事をさとらずして、民間の愁るところを知らざししかば、久しからずして、亡じにし者ども也。(覚一本)
- (15) 初版は青弓社、一九八九。引用は岩波書店、二〇一〇に拠る。
- (16) 翰林書房、二〇〇五。
- (17) 『國文學 解釋と教材の研究』三十一号、一九八六。
- (18) 「終末の不安」(『平家物語の読み方』所収、ちくま学芸文庫、二〇一一)。
- (19) 『日本文学』三十九号七、一九九〇。
- (20) 「源平交替史」(『平家物語の読み方』所収、ちくま学芸文庫、二〇一一)。